

降臨節第2主日 ルカ3章1―6節

〔直訳〕

- 1 だが皇帝ティベリウスの統治の十五番目の年において、
統治し ポンテリオ・ピラトが ユダヤを、
そして 治めて ガリラヤを ヘロデが、
だが彼の兄弟フィリポが 治めて イトラヤとトラコンの地方を、
そして リサニアが アビレネを 治めて、
2 大祭司アンナスとカイアフアのもとで、

起こった 神の言葉が ザカリアの子ヨハネの上に 荒れ野において。

- 3 そして 彼は来た すべてのヨルダン川周辺の中へ
宣べ伝えながら 悔い改めの洗礼を 罪の赦しの中へ、
- 4 書かれているように 預言者イザヤの言葉の書物において、

「叫ぶ者の声が 荒れ野において、

あなたがたは準備しなさい 主の道を、

- 5 真つ直ぐに あなたがたはしなさい 彼の小道を。

いづれの溪谷も 満たされるだろう

いづれの山も 丘も 低くされるだろう、

そして あるだろう 曲がったものは 真つ直ぐなものに

そして でこぼこのものは 平らな道に。

- 6 そして 見るだろう すべての肉は 神の救いを」。

〔新共同訳〕

- 1 皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンテリオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、2 アンナスとカイアフアとが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに降った。3 そこで、ヨハネはヨルダン川沿いの地方一帯に行つて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。4 これは、預言者イザヤの書に書いてあるとおりである。「荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。5 谷はすべて埋められ、山と丘はみな低くされる。曲がった道はまっすぐに、でこぼこの道は平らになり、6 人は皆、神の救いを仰ぎ見る。』」

①構成

① 1―2節前半

1節の冒頭に「皇帝ティベリウス」が登場させた後に、彼のもとで政治権力を分け持っていたポンテオ・ピラト、ヘロデ、フィリポ、リサニアがその支配地の名前と共に分詞形を使って列挙され、2節前半で、宗教的権力を手にしていた「大祭司アンナスとカイアフア」の名をあげている。「皇帝ティベリウス」と「大祭司アンナスとカイアフア」とがそれぞれの領域での権力者であることは、両者の名が「において」と「のもとで」に導かれた前置詞句に登場し、対応させていることから明らかである。

② 2節後半―4節前半

この段落は囲み罫で示したように、「言葉」で始まり、「言葉」で閉じられている。神の言葉は政治的権力者や宗教的権力者の上ではなく、荒れ野の「(洗礼者) ヨハネの上に」降った。彼が「来る」ことは、預言者イザヤを通して語られた「言葉」によって予告されていた。洗礼者ヨハネの到来は神の「言葉」のもとに引き起こされた出来事である。

③ 4節後半―6節

イザヤ書40章からの引用である。洗礼者ヨハネは「荒れ野において叫ぶ者」であり、その使命は「主の道」の準備を呼びかけることにある。この準備はただ人間だけで行われるのではない。受動形「満たされるだろう、低くされるだろう」は、神の行為を婉曲的に表す受動形であろう。人間が準備を始めると、神がそれを完成させる。その道を「神の救い」が到来する。

②時代背景(1―2節前半)

① 1―2節は「神の言葉が起こった」を主要部分とするひとつながりの文章である。この1―2節前半では、「神の言葉が起こった」時代背景を述べている。それが起こったのは「皇帝ティベリウスの統治の十五番目の年において」であり、「大祭司アンナスとカイアフアのもと」である。この二つの前置詞句によって、イエス時代の政治上の権力者と宗教上の権力者が示されている。

② 最初の前置詞句「皇帝ティベリウスの統治の十五番目の年において」の後の1節二行目から五行目には、「皇帝ティベリウス」のもとで、それぞれの地方を「統治し、治めて」いた権力者の名が列挙される。このように詳しく述べるのは、これから語られる出来事が歴史上の確かな出来事であることを荘厳に示すためであるが、同時に、権力や権威を求めてうごめく人間社会をほめかすためだろう。

③ このような時代を背景として洗礼者ヨハネが現れる。しかし、彼が登場する舞台は、華やかではない。権謀と術策がうずまく権力者の世界ではなく、ヨルダン川の周辺の「荒れ野」である。

③神の言葉のもとで(2節後半―4節前半)

① 荒れ野に登場した彼の上に「神の言葉が起こった」。これは預言者がよく使う表現法であり、神の言葉がくだった者は神からの力に突き動かされていることを表す表現である。洗礼者ヨハネがヨルダン川に来て洗礼活動を始めたのは、神が彼を促しているからだ。

② 3節は「そしてすべてのヨルダン川周辺の中へ彼は来た、…悔い改めの洗礼を宣べ伝えながら」という文章である。主語とは動作や状態の主体となるものことであるから、ここでは「彼は」がそれである。また、主語の状態や動作を表す定動詞(ここでは「来る」)が主動詞と呼ばれる。

これに対して、分詞形は動詞から派生し、形容詞や副詞として使われる動詞形であり、「宣べ伝えながら」がそれにあたる。ここでの「宣べ伝えながら」は主動詞「彼は来た」にかかる副詞的用法の分詞形である。副詞的な用法では、主動詞で表された状態や動作が行われる「時」や「様態」や「原因・理由」や「譲歩・認容」や「条件」や「目的」が表される。ここでの「宣べ伝えながら」が目的の意味で使われているなら、「宣べ伝えるために彼は来た」の意味になる。しかし、主動詞よりも分詞形によって、主要な動作が表されることもある。そうであれば、「彼は来て、悔い改めの洗礼を宣べ伝えた」となる。

◎聖書の「悔い改め(メタノイア)」は、旧約聖書の「シューブ(神へ立ち帰る)」に対応した語である。悔い改めは生き方の一部分の手直しでは終わらず、生きる姿勢全体を神へと向けることを表す。「神の救い」はそこに来ている。それに焦点を合わせた生き方が、聖書の述べる「悔い改め」である。だから、ルカは洗礼者ヨハネの使命を救い主に向けて人々を準備させることだと強調する。彼は「神である主のもとに立ち帰らせ」(一16)、イスラエルに生き方の刷新を勧め(使一三24)、準備のできた民を主のために用意する(一17)。

④「悔い改めの洗礼」とは、悔い改めを与える洗礼という意味ではなく、悔い改め、つまり生きる姿勢の全面的な転換を表すしとしての洗礼の意味だろう。

◎悔い改める(メタノエオー)・悔い改め(メタノイア)

⑦動詞メタノエオーは「心を変える・意図や意見を改める」が文字通りの意味。これまでの意見の誤りや不備がわかって考えを変える場合には、「後悔する・悔やむ」を意味する。名詞メタノイアも「心を変えること」や「後悔・悔い」を意味する。新約聖書では、使徒20章21節において使われ、単なる心変わりや生き方の手直しではなく、「生き方そのものを変えること・神に向かって生き方全体を転換させる回心」を表す。メタノイアは新約聖書では22回使われ、その半数はルカ文書の用例である(ルカ5、使6)。用例数が示すように、「悔い改め」はルカが好むテーマであり、マタイ・マルコがこれらの語を使わない箇所でも、ルカは使うことがある(ルカ五32、一五7、一七3・4)。

①洗礼者ヨハネは「悔い改めよ」(マタ三2)、「悔い改めにふさわしい実を結べ」と呼びかける(マタ三8、ルカ三8)。その呼びかけは、回心の必要がないと思われていた敬虔な人々を含め、イスラエル全体に向けられている(使一三24、一九4)。悔い改めの実を結ぶとは、ヨハネが宣べ伝える「罪の赦しのための、悔い改めの洗礼」を受けるところであり(ルカ三3、マコ一4、マタ三11)、また、自分中心的な生き方や不正な生き方を改めることである(ルカ三10―14)。民が洗礼を受け、これまでの生き方の刷新を身をもって示すようにと求められているのは、神の支配の時が迫っているからである。悔い改めを欠けば、差し迫った神の怒りを免れることができない(ルカ三7)。悔い改めの呼びかけを通して、ヨハネは「準備のできた民を主のために用意する」(ルカ一17)という使命を果たすことになる。

⑨イエスは神の支配の時が到来したことを踏まえたうえで、「悔い改めよ」と説く。だから、マルコ福音書では「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マコ一15)がイエスの第一声になる。今やイエスの到来によって時が満たされたから、悔い改めよ、と人々に求めることができる。このような悔い改めは、イエスが宣べ伝える福音を信じ、神がイエスを通して与える救いの恵みに信頼して生きることにはかならない。

⑩イエスが来たのは、「正しい人々ではなく、罪人たちを悔い改めへと呼ぶため」である(ルカ

五³²)。悔い改めは救いへの招きであるから、イエスから派遣された十二人も、「人々が悔い改めるように」と宣教を行う(マコ六¹²)。イエスは悔い改めない町を叱り(マタ一²⁰)、悔い改めなければ、皆同じように滅びると警告する(ルカ一三^{3・5})。神は人の悔い改めを忍耐して待っており(ルカ一三⁶⁻⁹)、罪人が悔い改めれば、大きな喜びが天や神の天使たちにある(ルカ一五^{7・10})。だから、兄弟が罪を犯しても、悔い改めるのなら赦してやりなさいと命じられる(ルカ一七^{3・4})。

④悔い改めはイスラエルの民ばかりではなく、異邦人にも求められている(使八²²、一七³⁰)。神の恵みは分け隔てなく、すべての人に向けられているからである(使一〇³⁵)。人の悔い改めを引き起こすのは、イエスを通して働く神である(ルカ二四⁴⁷、使五³¹、一一¹⁸)。パウロも神の慈しみが人を悔い改めに導くと考えており(ロマ二⁴)、コリント教会の人々が悔い改めたことを喜び、彼らの悔い改めは取り消されることのない救いに通じると述べる(2コリ七^{9・10})。

④主の道の準備(4節後半―6節)

①この段落はイザヤ40章3―5節の引用である。マタイとマルコの並行箇所でもイザヤ40章を引用するが、両者はイザヤ40章3節だけに引用をとどめている。ルカが4―5節をも引用したのには理由がある。

②まず4節(ルカ三⁵)であるが、「ここに使われた動詞が「満たされる」とか、「低くされる」というように受動形であることが注目される。ここでの受動形が、神が行為の主体であることを表す婉曲表現としての受動形(神的受動形)であるなら、谷を満たし、山や丘を低くし、でこぼこの道を平らにするのは神である。ヨハネの呼びかけに答えて、主を迎える道を準備し始めるのは「あなたがた」であるが、それを完成させるのは神である。私たちは準備しようと思っても、深い谷や越えにくい山、どこまでも続く丘やでこぼこで歩きにくい道にぶつかれば、決意も鈍ってしまう。しかし、悔い改めて準備を開始すれば、神が手助けして、主の道を完成させてくれる。ルカがイザヤ40章4節を引用したのはそれを述べるためだろう。

③さらに、ルカがイザヤ40章5節をも引用したのは、そこに「すべての肉は神の救いを見るだろう」という句があるからである。ルカ2章30節以下「シメオンの賛歌」にも「万民が神の救いを見る」とあるように、ルカは全世界が「神の救い」にあずかることを好んで強調している。

⑤神の言葉が働いている

①洗礼者ヨハネの登場は「神の言葉」によって引き起こされ、「預言者の言葉」によって予告されていた「神の救い」の開始を告げる幕開けである。洗礼者ヨハネはイザヤ書に書かれている通り、主の道を整えるようにと呼びかけている。第二イザヤは「谷はすべて埋められ、山と丘はみな低くされる」と語り、自然の変貌によって神の栄光が明らかにされることを告げる。そして、この変貌は捕囚民の帰還のためのものである。イスラエルのバビロニアからの解放と同様に、救いの道は神によって整えられる。

②洗礼者ヨハネが荒れ野に現れ、洗礼活動を行っても、すべての人がそこに「神の言葉」の働きを見るところは限らない。しかし、イザヤ40章3―5節を思い起こすルカは、そこに「神の言葉」が働いているのを見て取っている。神の働きを知っているから、救いの完成を確信することができる。この確信から希望が生じるのである。